

平成 22 年度環境測定分析統一精度管理ブロック会議議事録

- 東海・近畿・北陸支部 -

日時：平成 22 年 7 月 22 日（木）13：30～15：40

場所：滋賀県琵琶湖環境科学研究センター大会議室
（滋賀県大津市柳が崎 5 - 3 4）

1 開会

滋賀県琵琶湖環境科学研究センター 環境監視部門長 市木繁和

2 挨拶

滋賀県琵琶湖環境科学研究センター センター長 内藤正明

3 議事

（1）環境測定分析統一精度管理調査について

環境省水・大気環境局総務課環境管理技術室 室長補佐 高野厚

（2）平成 21 年度環境測定分析統一精度管理調査結果について

（財）日本環境衛生センター東日本支局環境科学部環境対策課 課長代理 並木章

4 特別講演

「環境測定分析におけるダイオキシン類等の簡易測定法について」

講師：愛媛大学農学部環境計測学 助手 松田宗明

5 ディスカッション

（参）：参加者 （助）：助言者・有識者 （環）：環境省

（1）廃棄物（ばいじん）試料の分析について

（参） 溶出試験の Cu 分析について、それぞれの分析方法の違いから、分析値のバラつきはみられたか。

（助） Cu については、低濃度ということもあり、どの分析方法でも室間精度は 30～40%と悪かった。これは溶出液作成時におけるバラつきが大きいためと思われる。分析方法については、標準添加法や内標法など様々であったが、標準添加法や内標法では CV 値が 30%程度、絶対検量線法ではバラツキが大きく 40%以上あった。

（参） 分析にかかる日数は出来るだけ短い方が良いか。また試料量が少ないと、当たり付けや失敗時の再分析が難しい。

（助） 溶出試験については、酸を入れて保管する段階まで進めば、ある程度安定すると考えられる。溶出から酸分解までは、迅速に実施するのが望ましい。

（参） 溶出試験のバラつきの原因は何か。

（助） 基本的には公定法どおり（固液比、ろ紙等）にすることが前提であるが、公定法に決められていない溶出時のヘッドスペース（空隙率）の割合、置き方・振り方が、室間精度に影響

響してくるのではないかと考えられる。調査結果では、横置き横振りが良く、横置き縦振りは良くなかった。

(2) 統計処理の仕方について

(参) 統計処理の仕方について、3回測定しているが、室内精度で棄却する必要はないか。例えば、R管理図は適用できないか。

(助) 室内精度は室間精度に比べて良い。

(助) これまででは、JISでのコクランの方法の適用を試みて「参考」として示したこともあったが、統計の委員を主とした検討では、コクランの適用はこの調査では良くないとなった。そこで、22年度から、R管理図ではないが、室内精度も棄却の対象とする予定である。それらの経緯、方法は21年度の報告書(本編)の最後の方に記載している。

(3) 既知濃度試料の提供について

(参) 既知濃度試料の提供は可能か。

(助) 要望(電話での問い合わせなど)があれば保管している試料を可能な範囲内で提供している。国環研(独)国立環境研究所)や産総研(独)産業技術総合研究所)で販売しているものを購入してもらうのも良い。ただし、費用が必要である。

(4) ダイオキシン類の生物検定法について

(参) ダイオキシンの生物検定法のために必要な施設は何か(クリーンルームは必要か)。

(助) 特別な施設は必要ない。温度設定ができれば問題ない。1検体3万円程度で受注もしている。

(5) その他

(環) 外部委託の件についてのアンケートを実施しているので御協力をお願いしたい。HPで国民から意見も聞いている。

6 次期開催担当機関挨拶

三重県保健環境研究所

7 閉会